https://www.jica.go.jp/okinawa/

JICA沖縄

独立行政法人 国際協力機構 沖縄センター

〒901-2552　沖縄県浦添市字前田1143-1

TEL：098-876-6000

2017年12月

日本も元気にする JICA海外協力隊

～ 沖　縄 ～

OKINAWA ▸▸▸ WORLD

世界を変えてきたのは、いつの時代も、たったひとりの強い想いだ。

何度もぶつかり、挫折しながら、それでも、たったひとりが自分の想いを貫くことで、

やがて無数の人の心を動かしていく。

あなたもここで紹介する９名のように、
沖縄と世界に“変化とインパクト”をもたらす一員になってみませんか。

い は こう ほ
伊波 興穂 ［ボリビア／小学校教諭］••••••••••P03
【現在の仕事】 沖縄盲学校

うえ はら み き
上原 未輝 ［ブラジル／日系日本語学校教師］•••••P05
【現在の仕事】 西原南小学校

かみ だ せい
神田 青 ［ラオス／青少年活動］••••••••••••••P07
【現在の仕事】 俳優

うえ しま まど か
上嶋 円香 ［サモア／美術］••••••••••••••••P09
【現在の仕事】 「集いつながる空間」なかゆくい

うえ はら かず ゆき
上原 一公 ［タイ／コンピュータ技術］••••••••••P11
【現在の仕事】 株式会社オーシーシー

しま ぶくろ え り な
島袋 江里奈 ［ベトナム／環境教育］ ••••••••P13
【現在の仕事】 国頭村環境教育センターやんばる学びの森

くし ま たけ し
串間 武志 ［タンザニア／空手道］ •••••••••••P15
【現在の仕事】 NPO法人レキオウィングス

なか むら み ゆき
仲村 美幸 ［ボリビア／行政サービス］•••••••••P17
【現在の仕事】 沖縄県庁

が ね こ せい しゅう
我如古 盛修 ［バングラデシュ／ハンドボール］•••P19
【現在の仕事】 公益社団法人青年海外協力協会

注：取材時2017年当時の情報になります

INTERVIEW

伊波 興穂（いは こうほ）

那覇市出身。大学卒業後、県内の教員として勤務。教員として籍を残したまま参加できる現職参加制度を利用し協力隊へ。帰国後は沖縄盲学校にて勤務。

・派遣国・

ボリビア
Bolivia

・活動分野・

小学校教諭

運命的な巡り合い

小学校で勤務していた当時、校長からボリビア移民60週年記念に合わせたボリビア旅行の誘いを受けた。ボリビアがどこあるのかさえ分からなかったが、実際に訪れて衝撃を受けた。「まさか地球の反対側で日本語を話している人たちがいるなんて!現地のお祭りで、エイサーや旗頭(はたがしら)などもやっていて、すごい場所だな!」とボリビアにある日系移住地のオキナワ市に心を奪われていく伊波さん。滞在中、「沖縄を“母県”と呼び、こんなにも僕を暖かく迎えてくれる方々に何か恩返し出来るものはないか」と考えていたところ、運命とも思えるニュースが飛び込む。沖縄県教育委員会とJICA沖縄の間で県教員をボリビアへ青年海外協力隊として派遣する協定が結ばれたのだ。もともと海外に興味はあったものの、教員の世界に入り、自分とは無縁だと感じていた協力隊に応募を決意した。

一人ひとりにとっての“沖縄”という答えを出すために

「他の隊員と違って、僕は行く場所もどんな人たちがいるのかも、どういうことを求めているのかも知っていたからこそ、逆に期待に応えられるかという不安もありました」。

協力隊として再び訪れたボリビアにあるオキナワ市。日系移住地の小学校で伊波さんは8年生(日本の中学2年生)の担任と日本語、幼稚園クラス、体育の授業を担当。日本語の授業では悩みも多く、その中でも学校でしか日本語に触れる機会がない日系3世の生徒たちの“どうして日本語を勉強しなければいけないのか”という声が伊波さんを一番悩ませた。答えの出ない中、伊波さんは“子どもたちがどう感じるか”がポイントだと考え沖縄に行くことを提案。第6回世界ウチナーンチュ大会に生徒17名を引率し帰沖した。

大会期間中、ボリビアの生徒たちを沖縄に住む親戚に会わせたり、県内の学校で交流を行ったり、肌感覚で生徒たちに“沖縄”を触れてもらった。

伊波さんは大会期間中に生徒たちの日本語の上達も目の当たりにする。「きっかけや活かせる場所があれば、子供たちはこんなにも伸びるんだと。やって良かった、教員をしていて良かったと思った瞬間でした。また、今回の体験を彼らの将来に活かす事が出来れば。沖縄との繋がりや文化の継承についてどう感じるか、どう行動していくか。選択するのは彼らですが、僕は選択肢や、考えたり感じたりするきっかけを与えたかった」と語る。

移住地の歴史について教えている様子

沖縄文化の三線について学んでいる

きっかけづくりを

帰国後は沖縄県立沖縄盲学校にて勤務。「生徒たちは学び方が違うだけで、学んでいることは多くの子と変わりません。僕自身が教材なんです」と生徒へ自身のボリビアでの経験を伝えている。働く上でも変化があり、「ウチナーンチュ大会を含め、ボリビアでの活動は一人では出来ないことばかりでした。以前は一人で物事を解決していましたが、今では周りに協力を頼めるようになりました。そうすることで情報共有だけではなく新しいものも生み出せます。また、異文化の中で活動してきたことで、子供の目線に立って、なぜこう思うのか、行動するのかと意見を聞き、より受け止める事が出来るようになりました」と語る。

今後の目標としては「県内の中高生が海外に行くきっかけはあるが、特別支援の子たちが外に飛び出すチャンスは少ないです。彼らにもそういう機会を作ってやりたいと思います。また、チャンスの時には彼らも自分から一歩踏み出す、そのきっかけづくりや選択肢を増やすサポートをしていきたいです。そして、僕自身のように、生徒たちが“もう一度会いたい人”を世界中に作れたら嬉しいです」と笑顔で語った。

ウチナーンチュ大会前夜祭パレードに参加

INTERVIEW

上原 未輝（うえはら みき）

宜野湾市出身。大学院にて日本語教育を専攻。卒業後、日本語学校教師として日系社会青年ボランティアに参加。現在は西原南小学校の教員として勤務。

・派遣国・

ブラジル
Brazil

・活動分野・

日系日本語学校教師
※日系社会青年ボランティア

世界に目を向け見えてきた進む道

小さい頃から両親に“沖縄だけでなく、外へ大きく羽ばたいて欲しい”と言われながら育ってきた上原さん。大学進学で県外に出たことをきっかけに、少しずつ沖縄から日本、日本から世界へと視野が広がっていった。「大学時代のフィリピン留学では、日本人の父親とフィリピン人の母親との間に生まれた子どもたちが“離れ離れになったお父さんといつか会ったときに日本語で話がしたい。お父さんに手紙を書きたい”と一生懸命に日本語を勉強する姿を見ました」。

フィリピンで出会った子どもたちに心を打たれ、将来は子どもの日本語教育に携わろと思うようになる。そして、大学院を卒業後、日本語学校教師として沖縄県系移民が多く住むブラジルのカンポグランデへ飛び立った。

本音で向き合うこと

派遣当初、唯一の同僚と活動方針について話し合いを持とうとした上原さん。ところが会議を何回もドタキャンされ、朝9時から夕方5時まで教室でただ座っていたこともあった。授業については“明日からこれやって”と使用教材を渡されただけでクラスや生徒のことも教えてもらえず、任された授業を必死でこなす日々。ポルトガル語もまだ十分ではなかった頃、生徒の保護者から信用を得ることも出来ず、自分がいる意味はあるのかと深く落ち込んでいた。

派遣から半年後、帰国を覚悟で今までの想いを同僚に全てぶつけてみた。すると同僚から思いがけない言葉が返ってくる。“はっきり言ってくれないとわからなかった。今の未輝とは本当の友達になることができる”本音でぶつかったことがきっかけで、上原さんと同僚は良い関係を築いていけるようになった。「外から来た者として遠慮している部分もありましたが、思っていることを伝えてから物事が進みました。活動のパートナーである同僚とは親友と言えるまでの関係になれました」。

こいのぼり作り

ブラジル学校への文化紹介

協力隊の経験を県内の子どもたちへ

帰国直後は県内の小学校にて日本語学習支援員として勤務。自身がブラジルで外国人として生活してきた経験は、違う言語の世界に放り込まれた子どもたちの気持ちを理解するうえでも活きている。「ブラジルでは“自分は自分”という考え方で、他人と違うことを気にしません。一方、日本では周りとの違いをすごく気にします。沖縄県内で日本語支援が必要な子どもたちはたくさんいて、特に両親のうち、どちらかが日本人で日本国籍を持つ子は、支援が必要でも見えにくい状況です。大人たちが特別支援クラスに入れることに対し、ネガティブな印象を持ち拒否する傾向にあるため、本当に日本語支援を必要としている子たちへの支援が行き届いていない現状があります。目や髪、肌の色、話す言葉が違うことは個性の一つです。子どもたちもですが、まずは大人たちや社会の理解が必要です」と話し、より学校や子どもたち、保護者への理解を促すべく支援員から教員を目指した。

今は教員として西原南小学校で4年生の担任をしている。「まずは教員としての基礎や学校のことを知り、将来的には日本語教室の担当として、子どもたちの抱えている問題に向き合い、寄り添っていきたいです。色々なことを知ったほうが、人生面白くなるんじゃないかと思います。だから、多くの子たちに私自身の経験を伝え、国際理解教育にもつなげていきたいです」と目標を語る。

カンポグランデパレード

INTERVIEW

神田（かみだ） 青（せい）

うるま市出身。大学卒業後、協力隊へ。現在は、舞台、特撮番組エイカーズグランドマスター（ヘラー役）を始め、映画、県内TVCMなど俳優として活動。

・派遣国・

ラオス
Laos

・活動分野・

青少年活動

アジアの演出家に向けての第一歩

「どうすれば好きなことで食べていけるのだろうか。あまのじゃくな性格なので、多数派ではなく、少数派の所で勝負したいと常に思っているんです」と語るのは戦隊ドラマやCM、舞台で活躍する神田さん。演技の世界に入ったきっかけはなんとも意外な理由だった。「大学に入るも僕は毎日つまらなさを感じていました。もう退学して世界を旅しようと思い、せっかくなら辞める前になにか恥ずかしいことをしよう!と。そんな中、ミュージカル募集の張り紙を見つけました」不純な動機で参加した学内ミュージカルだったが、それをきっかけに演技の世界にのめり込んでいった。いつかは“アジアで演出家”という夢を持つようになり、協力隊員としてアジアでの活躍の一歩を踏み出した。

小さな積み重ねが成功へと導く

配属先は子供発達センター（日本でいう児童館）。ここで、子どもたちと舞台を作り上げていく。派遣中も目に見えて変化を遂げるラオス社会の発展。「便利な生活になるにつれて、何を得て何を失うかを気づいて欲しい、わかっていて選択することと、いつの間にかに変わっているということは全然違うことです。発展のスピードより、そのプロセスを大事にしていく方が良いんじゃないかなと、これをテーマに舞台を作って子どもたちに演じてもらおうと思いました」。

演劇を見たこともない子どもたちと、まずは6分のダンスショー、その次はセリフを追加して発表時間も少しずつ長くしていくなど、小さな事を積み重ね、1時間ほどの舞台を作り上げた。「子どもたちに演技の指導をしたことはないです。僕はただの言いだしっぺで、作ったのは子どもたちです」と謙虚に話す。

ラオスの社会発展と環境保全とのジレンマを書き下ろしたミュージカル《未来への贈り物》は計4回公演を行い、回を重ねるうちに協力者も増えて、仕立ての衣装や小道具を使用するなど本格的なものに仕上がった。舞台は子どもたちだけではなく、ラオスの人々に自分たちの社会を考えるきっかけを与えた。

「舞台を通して子どもたちの絆や輪の広がり、一生懸命さを見る事ができ、活動のやりがいを感じました。経験したこと、悩んだこと、出来たこと、ラオスに知り合いや友人、仲間がいることはすごく大きいです。人との出会いに感謝ですね」と振り返る。

伝統舞踊公演時のステージ裏

第二回公演直前。国立文化会館にて

協力隊に参加して見えてきたこと

協力隊に参加し、即興力・共感力を養った神田さん。「共感力には想像力や洞察力が必要です。活動ではそういうことが欠けていれば独りよがりになります。一番大事なことは相手の国・文化・人をリスペクトすることです」。

また、国際協力に対しての見方も変わった。「派遣前は、敷居の高いものというイメージから実際に参加していろんな国際協力があっていいんじゃないかなと思いました。完璧な人間はいないですし、みんな欠点を持っています。同時にすばらしい部分も持っています。多種多様な課題が起こる社会において、課題をクリアしていこうという時に、様々なタイプの人がいる協力隊は強い集団だなと思います」。

沖縄からアジアへ

帰国後、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）沖縄事務所にて開発教育に携わる傍ら、演劇ユニットHashtagの一員として舞台や映像を中心に活動。現在は俳優業に専念している。「沖縄は東南アジアの真ん中に位置しています。そこが文化拠点になったら面白いなって思います。沖縄がいろんな文化のクロスロードになれると思っています」。沖縄を拠点にアジアへ活躍の場を広げようと取り組んでいる。

この笑顔があれば、どんなことも頑張れる!

INTERVIEW

上嶋 円香（うえしま まどか）

兵庫県出身。服地の製造会社で勤務後、協力隊へ。帰国後、地域おこし協力隊として活動し、現在は読谷村にある「集いつながる空間」なかゆくいにて勤務。

・派遣国・

サモア
Samoa

・活動分野・

美術

経験を活かして協力隊へ

大学院でテキスタイルデザインを学び、卒業後はプリント服地の製造会社でデザイナーとして働いていた上嶋さん。もともと海外に興味があり、学生の頃に協力隊の募集説明会に参加したこともあった。当時はいつか行きたいなと思うだけだったが、社会人として生活するなかで、やはり海外へ行きたいという思いが強くなり参加を決意する。自身の経験を活かせる美術隊員としてサモアに派遣される。配属先の職業訓練美術学校では14～25歳までの生徒にステンドグラスのデザインや色彩の指導を行った。

サモア生活で感じた平和

派遣後、数か月は学校の敷地内にある校長先生の家でホームステイすることになっていた上嶋さん。しかし、実際に行ってみると、そこは校長先生の家族だけでなく、親戚や家が遠くて通学が出来ない生徒たちも寝泊まりをする大人数での生活。心理的にも物理的にも距離が近いサモアで日本との違いを感じながら生活が始まった。

現地で初めて耳にするサモア語に始めはとても苦労し、毎日生徒たちや地域の人々とコミュニケーションをとりサモア語を習得していった。「道を歩くと気軽に声をかけてくれ、家に招いては“おもてなし”をしてくれるサモアの人々は、相手に対しての距離感が近いなと感じます。壁のない家に暮らすサモアには、一見、プライバシーがないように思えますが、そもそもプライバシーという概念がないんです。ホームステイが終わり、私が一人暮らしになった時には、みんな寂しくないかとすごく心配してくれました。外国や異文化だとすごく構えて壁を作りがちだけど、それがなかったら心地よく信頼関係を作れるし、平和に過ごせると思います。サモアの人々は家族や友達、お客さんをすごく大事にします。自分も周りも大事にできるサモアの方々を見て、これが本当の平和なんだろうなと思いました。結局みんなが周りの人たちを認め、大事にしていくことが世界の平和に繋がるんだろうなと感じました。また自国の良さをはっきりと伝えるサモアの方々は愛国心に溢れていると感じました」と話す。

サモアの壁のない家

配属先で作成したステンドグラス

自分らしく心地よく

帰国後は沖縄市が募集する地域おこし協力隊への参加をきっかけに沖縄へ。地域コーディネーターとして老若男女問わず地域の方々と交流する機会を多く持ちお祭りやアートイベントを開催。「サモアでは自分で企画し、実行していく日々でした。それが沖縄市での活動でも共通していました」。

現在は読谷村の“「集いつながる空間」なかゆくい”にて勤務。食育やアロマテラピーなどの自然療法を行うほか、レンタルスペースを提供し地域をはじめとした人々の集いの場となっている。「なかゆくいが人と人とのつながりの場となれば嬉しいです。それぞれのペースで過ごし、心地よさを探すお手伝いをしていきたいと思います」と語る。

今後について「誰かのために自分にできることをしていけたら幸せだなと思います。悩んでいる友達がいたらそっと側にいるように、ご縁をいただいた方の心にそっと寄り添える人でありたいです」と優しく微笑んだ。

ウチナーンチュ（沖縄の人）へのメッセージ

「自分の中にやってみたいという気持ちがあれば、まずは想いを大事にチャレンジすること！条件が整ってからと思っていることも意外と今でもできるかもしれないので、まずはやってみることです」

配属先（BEN Fine Arts Academy）にて、生徒たちと

INTERVIEW

うえ はら かず ゆき
上原 一公

那覇市出身。大学卒業後、県内にあるコンピュータサービス企業の株式会社オーシーシーに就職。現職参加制度を利用し協力隊へ参加し、帰国後は職場復帰。

・派遣国・

タイ
Thailand

・活動分野・

コンピュータ技術

思いを行動に

学生時代、テレビで映し出される海外に興味を持っていた上原さん。大学では機械システムを学び、大学卒業後は沖縄県にあるコンピュータ関係の会社に就職。社会人として日々、仕事に励んでいた。

入社数年後、仕事にも慣れ気持ちにも余裕ができた頃、ふと新聞で見た青年海外協力隊の広告に目が留まり、「海外で日本と違う環境を経験してみたい」という思いを抱くようになる。

会社に籍を残したまま協力隊に参加できる現職参加制度を利用し、自身の技術を活かせるコンピュータ技術隊員としてタイに派遣される。

コミュニケーションの中から見えてきた現場の声

配属先は中高一貫校。派遣当初、活動のパートナーであるPCの教員にスケジュールや会議室の管理システムを作ってほしいとお願いされ作成するも、誰にも使われない結果になってしまう。現場の教員たちが本当に必要としているものでなければ作っても意味がないと活動のパートナーに相談するも“あなたが作りたいものを作っていいよ”と半ば放任状態であった。

何のためにここに来たのかと考える日々の中、自ら積極的に行動し活動のパートナーや現場の教員たちとのコミュニケーションを心掛けていった。「休日の食事や旅行など誘われたものは何でも参加しました。同じ時間を過ごし、色々な話をしていくなかで、教員たちもだんだんと心を開くようになりました。コミュニケーションが取れてきて、冗談を言い合えるまでになったときは嬉しかったです」。

ある日、一人の教員から出席管理システムを作って欲しいと具体的な要望が提案される。実際に作成したシステムは他の教員にも使われ、次から次と要望が出てくるようになった。「協力隊に参加する前は自ら仕事を見つけなくても会社が用意してくれました。タイでは自分から積極的に行動しコミュニケーションを図って行かなければ相手が必要なものを提供することが出来ませんでした。行動力の重要性を感じました」と語る。

サイエンス大会でパズルを解いてる所

eラーニングの講習会

協力隊の経験を活かして

現在、海外展開を考えている(株)オーシーシーにとって協力隊経験のある上原さんは頼もしい存在だ。実際に海外進出の土台作りとしてベトナムへ派遣。現地の人々との信頼関係を築き、文化の違うベトナムと日本が足並みをそろえて仕事を行っていけるように取り組んだ。

今の業務は自治体のシステム開発本部とグローバル戦略部と部署を超えて仕事に取り組んでいる。一見、多忙そうに見えるが、仕事は量より質を重視し、やるべきことはきちんと行いながらもワークライフバランスを大事にしている。これは協力隊経験を通して学んだことだ。「タイの人々と一緒に過ごすことで、仕事は生活するための手段であって大事なのは、家族や自分らしく楽しく生活できることだと教わりました」。

また、(株)オーシーシーでは沖縄から海外への展開だけではなく、海外から沖縄にITの技術研修で来ている研修員の受け入れも行っている。

上司であるグローバル事業戦略部長の比嘉さんは「協力隊の活動は今後の人生を左右するくらい大きな素晴らしい活動だと思います。上原さんには協力隊経験を会社全体で共有し、今後の成果に繋げていけるような役割を担って欲しいです。我が社にとって海外が当たり前になっていければ」と期待を寄せる。

また上原さんも「協力隊での海外経験を活かし、外国人と一緒に仕事をしていきたいです。海外展開をする会社での橋渡しをして行きたいです」と今後の目標を語る。

取材時に上司の比嘉さんと

INTERVIEW

島袋 江里奈（しまぶくろ えりな）

名護市出身。大学卒業後、マングローブのツアーガイドとしてやんばるで勤務後、協力隊へ参加。帰国後はやんばる学びの森にて自然案内員を務める。

・派遣国・

ベトナム
Vietnam

・活動分野・

環境教育

やんばるの大自然から ベトナムの地へ

名護市出身の島袋さんは大学在学中からマングローブの案内員を行うなど、やんばるの大自然と関わりながら生きてきた。

協力隊へ参加するきっかけは模合(もあい)(沖縄版頼母子講)の席で友人に「沖縄を出て違う世界を見てみたい」と話した一言。友人に青年海外協力隊を紹介され、すぐさま応募し環境教育の隊員としてベトナムの地に降り立つことになった。

言葉と文化の壁を感じた 活動の日々

配属先の国立公園に派遣された島袋さんを待っていたのは歓迎どころか“言葉もわからない外国人が何しに来たのか”というスタッフたちの冷たい態度だった。“言葉も出来ないくせに”と相手にされず、コミュニケーションも取れないまま時間だけが過ぎて行った。

「感情をそのままぶつけてくる現地の人や、同僚の仕事に対する姿勢に不満を抱いていました。活動先の近くにある商店で昼食を取ろうとしても店主から“昼寝の時間だから閉店する”という自分勝手なベトナム文化に腹を立てることも多かったです。言葉を覚えるのはすごく大変だったけど、負けてられるかと思って、毎日単語を書いて覚え、土日もずっと勉強しました。話しやすい現地の方たちと一緒にカフェへ行き、うまく会話が出来ない中でもずっとベトナム語を聞いたりしていました」。

時間の経過とともにベトナム語だけでなく、文化の違いもだんだんと受け入れ、理解できるようになった。「こういう文化なんだと思い始めてからは、だいぶ変わりました。だいぶ切り替えられましたね。ベトナム人の人懐っこいところや世話好きなところも見えるようになり、随分助けられもしました。何事にもポジティブな発言で自分自身を前向きに動かしていくベトナム人はやると決めれば全力で取り組みます。日本人にはあまりない考えですね」と語る。

ゴミ分別ゲーム

環境問題ゲーム

多種多様だから刺激があって面白い!

ボランティアに参加したことで派遣前の訓練生活では日本全国の様々なバックグラウンドを持った人々と出会い、海外での生活では異文化の現地の人々と共に過ごしてきた。「沖縄にいたままでは出会えなかった人たちと出会い、世の中いろんな人がいるなと感じました。“普通”なんてないし、そうじゃないと面白くないです。いろんな考えがあるから比較できて面白さや学びがあります」と話す。

帰国後、国頭村環境教育センターやんばる学びの森で自然案内員として再び活躍する島袋さん。協力隊を終え、特にコミュニケーションの部分で自身の変化を感じる。「振り返ると、長い人生の中の2年間です。たった2年間がとっても濃い2年間でした。ベトナムでも日本でもコミュニケーションは大事なツールで、意外とどこも同じですね。異文化の中で活動してきたからこそ、より相手の発言や習慣、バックグランドを見て“その人”を理解するようになりました。また、自分自身の考えを伝えるときは、どうわかりやすく伝えるかをより意識するようになりました」。

人と自然を元気に

「これからもずっと自然に携わっていきたいです。沖縄といえば海!と答える人が多いですが、沖縄には素晴らしい山もあります。世界自然遺産登録も目指しているやんばるの森を“自然を壊さないままで”訪れる方々に楽しんでもらいたいです。将来は特に心の悩みを抱えている人や病気を持っている人、山も海も見たことがない方に、自然を感じることで元気になってもらえるような活動を目指したい」と今後の目標を語る。

エコバック作りを教えている様子

INTERVIEW

串間 武志（くしま たけし）

宮崎県出身。大学卒業後、IT関係の企業に就職。5年間の社会人経験を経て、協力隊へ参加。現在はNPO法人レキオウィングス理事を務める。

・派遣国・

タンザニア
Tanzania

・活動分野・

空手道

空手道でタンザニアへ

落ち着いた口調の中にも静かな情熱が灯る串間さん。大学時代は空手道に励んでいた。大学卒業後、民間企業の営業職として勤務していたが、空手の経験を活かせる協力隊の事を知り、参加を決意。

赴任先がタンザニアと知った時には「どんな人たちなんだろうとイメージが付きませんでした。背が高いのか、力が強いのか。全く未知の世界でしたね」と当時を振り返る。

空手でつながる沖縄との縁

絶景キリマンジャロのふもとにある配属先の警察学校で、18〜23歳の学生に空手の指導を行う。練習場所の環境は一切整っておらず、地面にシートを敷くことから活動を始めた。「学生はいちから空手を教わるので、教えれば教えるほど、どんどん覚えていき、やりがいが大きくありましたね」と語る串間さん。「人に教えるようになる為には、自分も日々勉強しないといけないと感じ、その時はかなり体の使い方や呼吸の方法も勉強しました。限界を乗り越えたときに、根性が付いたり、挨拶や礼儀が身についたり、成長を感じることで自信を持てるようになります。理論だけ教えても身につかないので、肉体と精神面をリンクさせた練習も行いました」と“自身の競技”から“指導する空手”への変化を改めて感じた。

また、タンザニアでは道着が不足していて、串間さんは剛柔流の本部にタンザニアの現状を手紙で伝えた。それが沖縄の剛柔流協会に伝わり、さらに空手衣・空手用品専門店の守礼堂へと伝わり、道着が寄付されることになった。沖縄県青年海外協力隊を支援する会の“小さなハートプロジェクト”が輸送費を支援し、タンザニアまで送り届けられた。「私が他県出身にも関わらず、沖縄の方々は快く協力し支援してくれました」。こうして現在、沖縄で活躍する串間さんと沖縄との縁は繋がった。

2014年・住民説明会・ベトナム

2011年・協議・マレーシア

沖縄から発信する独自の国際協力を目指して

協力隊の活動を終えて、帰国後はJICAのボランティア調整員として再びタンザニアへ渡った串間さん。「現地では、警察官として全国各地に配属された教え子たちと再会することもありました。成長した教え子と会えたのはすごく嬉しかったです」と語る。

その後、JICA沖縄にて草の根技術協力事業を担当する。2011年には協力隊経験者らと沖縄と世界各地の人々・物を結び付け、沖縄の発展にも繋げられればと思いNPO法人レキオウィングスを立ち上げた。現在、レキオウィングスは国際人材育成支援事業や南城市と協働で同市をモデルとしフィリピンのビクトリアス市で自然や農業によって街を活性化させる草の根技術協力事業などを行っている。「協力隊をきっかけに様々な視点で国際協力に携わってきたことが、現在の仕事のマネジメントや活動国を理解することに活かされています」と語る。

また、2015年には、守礼堂をはじめとした4団体の協力を得て、タンザニア剛柔流空手道連盟に道着を200着以上寄付。今でも串間さん、そして沖縄とタンザニアは空手を通して繋がっている。

ウチナーンチュ（沖縄の人）へのメッセージ

「沖縄は国際協力に積極的にかかわってくれる人が多いと思います。沖縄県が提唱する“世界に開かれた交流と共生の島”の実現のためにも国際協力は必要です。そして僕たちプレーヤーがどうやって持続可能にできるかが課題でありキャリアパス、ゴールへのプロセスとして沖縄の人には協力隊へ積極的に参加してほしいです」

2012年・協議・トンガ

INTERVIEW

仲村 美幸
なかむら みゆき

那覇市出身。沖縄県職員として勤務。現職参加制度を利用し、県に籍を残したまま協力隊へ参加。現在は沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課に籍を置く。

・派遣国・

ボリビア
Bolivia

・活動分野・

行政サービス

初海外でボリビアへ

県職員の仲村さんが協力隊に参加するきっかけになったのは、出発前の協力隊員との出会い。同世代の女性隊員から協力隊参加への思いを聞き、いつか海外でボランティアをしてみたいと憧れを抱くようになる。

それから8年ほど経過した頃「人の役に立てる仕事ができているのかと疑問が湧き、自分を成長させたい、変えてみたい」とずっと心の中にあった協力隊へ参加。初海外となるボリビアで活動することになる。

相手を尊重することで見えてくるもの

配属先は沖縄県系移住者が多く住むサンタクルス県オキナワ市の保健所。当時、活動先はパソコンが普及し始めた頃で、データ管理が不十分な保健所では看護師たちが地域の家を一軒ずつまわり、予防接種を受けていない子どもたちを探し歩いていた。仲村さんは乳幼児の予防接種のデータ化と管理に取り組み、看護師たちに情報を提供。業務の効率化を図った。「データ管理だけだとまわりと接する機会もないので、保健師や栄養士の活動にも顔を出したり首を突っ込んだりしていました」。

高齢者グループ及び保健所スタッフ

デイサービスでの健康チェックの様子

自身の帰国後も看護師たちがデータを活用していけるように指導に取り組もうとするも、業務が増える事を嫌がる看護師たちはその場しのぎの返事。師長には会議もすっぽかされ、腹立たしく悔しい思いを抱いていたが、日系人が経営する老人介護施設との関わりをきっかけに少しずつ考えが変化していく。「日系の方々は自国の文化やアイデンティティーに誇りを持ち、それを受け継ぎつつも、ボリビアの人々や文化に対して敬意を払い受け入れ、ボリビア社会の中で確固たる信頼を得ていました。その姿は国際ボランティアに関わる者のあり方として共通するものがありました」。

現地のやり方を尊重しようと考えを改め、次第に看護師たちの立場や待遇の違いなど働く背景も見えてきた。「新しいことに取り組んでもその努力が社会的な評価として返ってこないに等しい。一概にやる気がないのではなく、逆にこんな中よく働いているなと。活動への理解を示してくれるようアプローチを続けながらも、自分の出来る事をやろう!と気持ちを切り替えました」。

帰国直前のさよならパーティーでは「師長から“あなたがしてきた活動は素晴らしいものだったのに協力できなくて悪かった”と涙ながらに言われました。その瞬間、あー、本当にやってよかったな」と今でも目頭を熱くする。

世界に架かるウチナーンチュネットワークの構築に向けて

帰国後は県職員として職場復帰。沖縄の伝統文化に関わる部署も経験し、今は国際交流を担当する交流推進課に配属。「ボランティア活動を通し、仕事上でも型にはまりすぎず柔軟に進めていけるようになりました。また、以前はウチナーンチュとしての意識を持っていませんでしたが、現地の方の文化の継承や沖縄に対しての思いの深さも知り、自分を恥ずかしく思いました」と話す。

そして、ボリビアの地で沖縄に想いをもっている人たちのことを知って欲しいとボリビア移住60周年に合わせて、協力隊経験者の仲間とボリビアを紹介するイベントを開催。これからの目標としては“ウチナーンチュネットワークの継承”を掲げ、たくさんの子どもたちに世界に雄飛している県系移民との交流の機会をより多く与える事を目指す。そして「いつかシニアボランティアとしてもう一度海外へ出たい!」と笑顔で話す。

ミゲルゴールド保健所のスタッフと

INTERVIEW

我如古（がねこ） 盛修（せいしゅう）

那覇市出身。大学卒業後、協力隊へ参加。帰国後はJICA国際協力推進員を務め、現在は公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）沖縄事務所にて勤務。

・派遣国・

バングラデシュ
Bangladesh

・活動分野・

ハンドボール

ハンドボールを世界の舞台で

ハンドボール中心の生活を送ってきた我如古さんは大学在学中、九州の大学生リーグで得点王＆MVPを取るほどの腕前だった。海外に興味を持つきっかけになったのは大学時代の恩師、桜井先生との出会い。「桜井先生の話がワールドワイドで興味深く、人生観や価値観の幅の広さがかっこいいなと思いました」。

青年海外協力隊についても紹介され、大学3年生の時に募集説明会に参加。卒業後、ハンドボールの職種でバングラデシュに派遣される。

ブレない心で伝えた想い

「ハンドボールは道具や基礎技術がない途上国でも集団球技の楽しさを伝えるのに最適な種目。運動が苦手な人でも参加できる」と言葉や文化の壁を越えて活動に励む。選手への技術面の指導はもちろんの事、審判に対しても平等に笛を吹くという概念を持ってもらうように取り組んだ。

しかし、開催地や裕福なチーム側へひいきがはびこるバングラデシュで、審判への指導は容易なものではなかった。公平な我如古さんの笛に、ときには一部の過激ファンから脅迫めいたことも言われた。それでも現地の人が自分の姿を見て、変わってくれればと自身の想いを貫いた。「いかに平等にジャッジをするかはマインドの方が大事なんです。若かったから怖いもの知らずで全力で気持ちをぶつけられたんだと思います」と話す。

ハンドボールに対してまっすぐな、我如古さんが指導するチームは今までバングラデシュにはなかったディフェンスの方法を取り入れるなどし、メキメキと実力を上げていく。そして、優勝を独占していたチームを破り、見事優勝を果たした。

「人生で一番の喜怒哀楽を感じたのはバングラデシュです。帰国前には三日三晩みんなと共に泣き明かしました。チームが優勝したことも嬉しかったですが、一緒に泣いてくれる人がいたという事は、今思い出してもすごく嬉しいですね」と振り返る。

活動のほかにも、現地の冠婚葬祭やイスラム行事などに積極的に参加するなどコミュニケーションを取ることも心掛けた。現地の人と同じ目線で生活することで教育、社会、経済など日本との違いを肌身で感じた。「今までの生きてきた人生と違う価値観を持つ人たちの中で一緒に過ごし、新しい“ものさし”を持てました」と語る。

ハイサイロード

三線に集まる村人

協力隊は人生100分の2年のかくし味

帰国後は縁あって国際協力の道へ。現在は公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）沖縄事務所にて勤務し、グローバル人財の育成に力を注いでいる。また、障害児とその家族の介護負担の軽減や孤立化を防ぐためのケア施設の設置に向けた取り組みも行い、すべての人が社会と接点を持てるような住みやすい地域づくりを目指している。

そして、我如古さんと言えばご家族についての話題も外せない。当時、派遣前の訓練で恋心を抱いた相手の派遣国はバヌアツ。9,395kmもの遠距離の中、2年間手紙やプレゼントのやりとりを行い、帰国後二人は結婚!また、我如古さんのお姉さんも協力隊員としてインドネシアに派遣。自他ともに認める協力隊一家である。

自身の子どもたちにも協力隊に参加して、世界で活躍して欲しいと語り、次世代への期待も寄せる。「協力隊の経験は料理でいう“かくし味”。100歳生きるとして、たった2年間でしかない協力隊生活だけど、それがすべての味（人生）に刺激や影響を与えています。沖縄から世界に出て、いろんな価値観や世界観を身に付けて、また沖縄へ戻ってきて欲しいです。様々な場面での交渉力や引っ張っていく力があれば沖縄の未来は明るいかなと思います」。

女子ハンドボールチームと

沖縄県　JICA海外協力隊派遣実績

※2021年12月1日現在